

スタンダールとモラリストたち

杉本 圭子

修士課程の2年目に、塩川徹也先生の授業でラ・ロシュフコー、ラ・ブリュイエールのテキストを精読する機会があった。その年のメインはラ・ロシュフコーであったと記憶している。ラ・ロシュフコー（1613-1680）が生前最後に出した『箴言集』（*Maximes*）1678年のテキストを用いての授業で¹、残されている古い書きこみを見ると、あるいは講読したのは『箴言集』といっしょに収録されることの多い『考察』（*Réflexions diverses*）のほうであったかもしれない。授業では「モラリスト」の語の辞書的な定義の点検からはじめ、「箴言」を育んだサロンという場と、当時の社交人にとっての全人格的な理想であった「オネットム」（*honnête homme*）の具体的な像が示された。今もってそうであるが、とりわけ当時は古典主義時代特有の語法や語彙にとまどい、ぎりぎりまでそぎ落とされた端正な数行の文章に凝集されている皮肉や諧謔を読み取るなどとうていできず、二宮フサ氏の翻訳をたよりに、フルティエールの辞書を引き引き、やっとのことで授業についていった覚えがある。人間の欺瞞、偽善を暴いたラ・ロシュフコーが、あらゆる行動の根本原因として名指した「自己愛」（*amour-propre*）という概念は深く心に刻みつけられ、以来、時代を下ったテキストの中でこの語に接するたびに、「うぬぼれ」ほどの軽い意味で用いられた用例であっても、そこに脈々と流れこんでいる文学的伝統に思いを致すようになった。

フランス革命前夜に地方都市グルノーブルに生まれ、ヴォルテールと親交のあった母方の祖父の影響のもとに育ったスタンダール（1783 - 1842）の生家にも、当然のごとくモラリストたちの本はあった。劇作家を志し、パリで文学修業に励んでいた20歳のころ、アンリ・ベールは故郷に残してきた3歳年下の妹ポーリーヌの教育係を自任し、自らが涉猟した小説、演劇、思想書、歴史書の類を読むよう、矢継ぎ早に手紙を書き送っているが、1803年2月8日の妹宛の書簡には、ヴォルテールの『ルイ14世の世紀』と並んでラ・ブリュイエール（1645-1696）の『カラクテル』（1688）が挙げられ、「[二冊が]一冊になったのがパパの書斎の入り口近くの4段目の棚にあるから」と

¹ La Rochefoucauld, *Maximes*, texte établi par Jacques Truchet, Garnier Frères, 1967. 本論文での引用はすべてこの版から行う。日本語訳については『ラ・ロシュフコー箴言集』、岩波文庫、（二宮フサ訳）を参照し、必要に応じて改変した。

の指示がある²。後年執筆の自伝テキスト『アンリ・ブリュラーの生涯』(*Vie de Henry Brulard*, 1835-1836 執筆、死後出版)でも、『カラクテール』の「最初の 20 ページのエスプリ」をほめ、ラ・ブリュイエールが「1803 年の私に文学教育を施した」とまで書いていて³、よほど愛着のあるテキストであったことはまちがいない。女優業の恋人を追って半ば「ヒモ」状態でマルセイユに暮らしていた 1805 年にも、「退屈なので」エルヴェシウスやシェークスピアなどとともラ・ブリュイエールを送ってほしい、とポーリーヌに頼んでいる⁴。その後も折にふれて読み返していた形跡があり、1842 年にパリで急死したとき、その前年まで住んでいたイタリア中部の小さな港町ヴィタ・ヴェッキアの領事室には、モンテーニュ『エッセー』のさまざまな版、パスカルの『パンセ』とともに、『カラクテール』の三巻本(1836 年版)が残されていた⁵。

ラ・ロシュフコーの『箴言集』についても、この 20 代初めの文学修業時代にしばしば参照し、移動のたびに持ち運んでいた形跡がある。1803 年 6 月から翌年 3 月にかけて、スタンダールは幼時から一家でよく訪れていた父親の領地(クレ)にある別宅にこもり、構想中の喜劇『二人の男(*Deux hommes*)』、未完)の準備と執筆に専念していた。その時期に書かれたメモの中に「所蔵本一覧」(*Catalogue de tous mes livres*)という覚え書があり、当時のスタンダールが傾倒していた古典作家、現代作家の顔ぶれがわかって興味深いのだが、そこでは 60 作品ほどが「クレにある本」、「パリにある本」の二手に分類されている。ラ・ロシュフコーの本はラ・ブリュイエール、ホラティウス、ヴェルギリウス、ダンテ、アリオスト、シェークスピア、トマとピエールの両コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ルソー、ヴォルテールなどととも前者に含まれており⁶、このうち両コルネイユとシェークスピアの数作品、アルフ

² Stendhal, *Correspondance générale*, édition Victor Del Litto, t. I (1800 - 1809), Champion, 1997, p. 83.

³ Stendhal, *Vie de Henry Brulard* in *Œuvres intimes*, édition établie par Victor Del Litto, t. II, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », p. 923. ただしこの賛辞も留保つきで、『アンリ・ブリュラー…』執筆時点の 1836 年には、ラ・ブリュイエールはいささか幼稚で空疎にうつる、と続けている。

⁴ Lettre à Pauline, 9 octobre 1805, in *Correspondance générale*, t. I, éd.cit., p. 346.

⁵ *Catalogo del fondo stendhaliano Bucci*, éd. Gian Franco Grechi, Milano, All'Insegna del pesce d'oro, 1980.

⁶ Stendhal, *Journaux et papiers*, Vol. I (1797-1804), édition établie par Cécile Meynard, Hélène de Jacquolot et Marie-Rose Corredor, Grenoble, ELLUG, 2013, p. 462. メモには「les Réfl[exions] de La Rochefoucauld」とあるが、もともと『箴言集』は『省察』と抱き合わせの形で出版されており、原題にも両方が含まれている。たとえば 1789 年

イエリなどの数冊は、パリに帰る際に「持ち帰るべき」本のリストに入れられ、とくに大事にされていたことがわかる⁷。後述するように、ラ・ロシュフコーとラ・ブリュイエールの二人の作家の文章は、劇作家を目指す若きスタンダールにとって、ひとつの規範となっていた。

この時期のポーリーヌへの手紙の中でしばしば言及されるもう一人のモラリストに、18世紀最後のモラリストと言われるシャンフォール（Chamfort, 1741-1794）がいる。今日では数々の機知に富んだ箴言の作者としてかろうじて名をとどめるこの文学者には、アカデミー学者、歴史家、詩人、悲劇作家など実にさまざまな顔があり、スタンダールがしきりに妹に勧めたのはもともとよく知られた『格言と省察、人物と逸話』（*Maximes et Pensées, caractères et anecdotes*, 死後出版、1795）ではなく、18世紀の文人や軍人の『回想録』注解のほうである⁸。この時期のスタンダールは習作戯曲『二人の男』の人物造型のため、オルレアン公フィリップの摂政統治時代の風俗を伝える歴史書や回想録の類を集中的に読みこんでいたためだ。それに対して、後年の小説や評論で引用・借用されるのは、もっぱら格言や逸話のほうである。

18世紀と19世紀のはざまに生を受けたスタンダールは、なんといってもこれらの作家の箴言、格言が自然と口をついて出てくる世代に属していた。たとえばイギリス人向けの文芸雑誌に寄稿した1827年の評論では、現在の内閣の大臣たちはひどく凡庸な人物たちだが、才人を多く生み出している南仏の出身者であることで、多少の見どころはあるのかもしれないと譲り、「かの有名なラ・ロシュフコーも言うように、ある程度の才能がなければ大きな幸運にはたどりつけない」と書いている⁹。これはおそらく箴言153「自然が才能をつくり、運命がそれを活性化する¹⁰」を踏まえていると思われる。

そして彼の小説の登場人物たちもこうした習慣を受けついでいる。たとえば処女作『アルマンズ』（1827）で、羞恥心と自尊心から、ひそかに思いを

にパリで出た版のタイトルは *Réflexions, Sentences et Maximes morales de M. Le duc de La Rochefoucauld* (éd. Brotier) であった。

⁷ *Ibid.*, « Catalogue de tous mes livres » (23 février 1804, pp. 462-463) および « À emporter » (10 février 1804, pp. 457-458) の2つのメモを参照のこと。

⁸ リシュリュエ枢機卿の血縁にあたるリベルタン、リシュリュエ元帥の『回想録』（1790）の注解（Chamfort, *Sur les quatre premiers volumes des Mémoires du maréchal de Richelieu*）や、やはりモラリスト的傾向をもつ作家デュクロの『秘録』（死後出版、1790）注解（*Sur les Mémoires de Duclos*）など。

⁹ « Esquisse de la société parisienne, de la politique et de la littérature XIV », *New Monthly Magazine* (février 1827) dans Stendhal, *Paris-Londres, Chronique*, édition établie par Renée Dénier, Stock, 1997, p. 800.

¹⁰ La Rochefoucauld, *op.cit.*, p. 40.

寄せる従兄オクターヴとの結婚話をかたくなに拒否する女主人公のアルマンは、「結婚は恋愛の墓場だと、よく言うじゃないの。気持ちのよい結婚はあっても、楽しい結婚は皆無だと」とひとりごちる¹¹。これはラ・ロシュコーの箴言 113「よい結婚はあるが楽しい結婚はない¹²」をふまえている。世間知にかこつけて本心を押し殺そうとする女主人公の心理を描くために、作者は自ら慣れ親しんでいた箴言を援用したわけである。もっとも当時であっても、二十歳になるかならないかの娘の口から発せられるこうした物言いは、いささか時代錯誤な印象を与えたのではないだろうか。

そもそもスタンダールが当時一世を風靡していたシャトーブリヤン風の詩的で流麗な文体よりも、簡素で直截な表現・文体を好んだことはよく知られており、格言のような凝縮された、短い形式の文章への嗜好もそこからきている。小説でいえば、『赤と黒』第1部第19章のタイトル「考えることは苦しみのもと」(« Penser fait souffrir »)、あるいはよく引かれる例では同第27章中の「あらゆる正論は怒りを買うものだ」(« Tout bon raisonnement offense »)などが挙げられよう¹³。こうした数学的命題のような表現は、やはりスタンダールが文学修業中に熱中して読んだヴォルテールと同時代のモラリスト、ヴォーヴナルグ(Vauvenargues, 1715-1747)の箴言(*Réflexions et maximes*『省察と箴言』、1746)に近いものを思わせる。ただしここには真実を鋭く突きながらも、一般化して示すことにより、かたやわが子の急病が自らの犯した過ちへの天罰であると思ひこむレナル夫人の苦悩を、かたや神学校の閉鎖的で偽善的な雰囲気になじめないジュリヤンの苦境をいわば相対化し、和らげようとする年長者(作者)の寛容な姿勢が感じられる。格言風の物言いは、必ずしも対象を皮肉に突き放すばかりではない。

このように、モンテーニュからシャンフォールに至るモラリストたちの著作は、若きスタンダールが思考の型や文体を形成するうえで大きな糧となっていたことが察せられる。ここでは特に言及の多い17世紀の2人のモラリス

¹¹ *Armance dans Stendhal, Œuvres romanesques complètes*, t.I, éd. établie par Yves Ansel et Philippe Berthier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, p. 153.

¹² « Il y a de bons mariages, mais il n'y en a point de délicieux. » (La Rochefoucauld, *op.cit.*, p. 31). スタンダールの原文では « Ne dit-on pas [...] qu'il peut y avoir des mariages agréables, mais qu'il n'en est aucun de délicieux ? »とあり、対句表現はそのままだが語彙が微妙に異なっている。

¹³ *Le Rouge et le Noir, Œuvres romanesques complètes*, t.I, éd.cit., p. 448 および p. 519. 評論家ジャン・プレヴォは『赤と黒』のこの一節を、スタンダールが好んだ幾何学的命題に類する格言調の表現の典型としている。Jean Prévost, *La Création chez Stendhal* (1951), Gallimard, coll. « Folio Essais », 1996, p. 36.

ト、ラ・ロシュフコー、ラ・ブリュイエールを取り上げ、スタンダールが彼らの生涯と作品から何を汲み上げたかを、順に見ていく。

ラ・ロシュフコー

一流の王侯貴族の集うサロンでの会話を通じて磨きぬかれたラ・ロシュフコーの『箴言集』は、その苛烈な前半生を反映して、人間の本性、欺瞞、悪徳、浅はかさ、愚かしさを、わずか数行の無駄のない文章を用いて容赦なくえぐり出す。スタンダールはこの書物を妹にしきりに勧めながらも¹⁴、ときにそのあまりに悲観的な人間観に辟易することもあったのか、「ラ・ロシュフコーはひどく陰気なモラリスト (*un moraliste bien triste*) で、つねに正しいとはかぎらない¹⁵」とも書いている。ともあれ、人生の入り口に立ったばかりの文学青年が書物の上の知識を総動員して、同じく世間知らずの妹にむかって人生指南しようとするさまはほほえましい。

文学修業の観点からいえば、劇作家を目指す青年にとって、否定・限定表現、対照法、比喩、反語、逆説、文末の「落ち」などの文学的技巧をみごとに駆使したラ・ロシュフコーの文章は、ひとつの規範となったはずだ。もちろん、舞台の登場人物に格言調のせりふをそのまましゃべらせるわけにはいかない。だがたとえば後年の小説の中で、パリのサロンに群れる上流階級の男女の、耳触りはよいが恐ろしく内容空疎な会話を描くとき、スタンダールの頭には、社交術、会話術のなんたるかを知り尽くしていたラ・ロシュフコーの警句の数々が浮かんでいたにちがいない。たとえば『赤と黒』で、マチルドを嫉妬させるためにジュリヤンが近づいた、フェルヴァック侯爵夫人の手紙の文面に触れるとき、夫人は貞女の鏡を自任する、宗教かぶれの未亡人である。

それら [フェルヴァック夫人の手紙] はロシアの青年貴族の手紙と同様に難解だった。漠然としていることこのうえない。すべてを言っているようで、何も言っていないかった。エオリアン・ハーブみたいな文体だ、とジュリヤンは思った¹⁶。(『赤と黒』第二部第27章、傍点強調は論者による)

いっぽう、ラ・ロシュフコーの次の一節。いつの時代も凡人の言葉は空疎である。

¹⁴ たとえば以下の書簡を参照。Lettre à Pauline, 17 septembre 1805, in *Correspondance générale*, t. I, éd.cit., p. 326.

¹⁵ Lettre à Pauline, 6 juillet 1804, *ibid.*, p. 168.

¹⁶ *Le Rouge et le Noir*, éd.cit., p. 717.

数少ない言葉で多くのことを伝えるのが才人の特性なら、逆に小人物の才能は多くをしゃべって何も言わないことにある¹⁷。(ラ・ロシュフコー『箴言集』箴言 142、傍点強調は論者による)

さきほど、初めての小説『アルマンズ』の同名の主人公が「よい結婚はあるが楽しい結婚はない」というラ・ロシュフコーの箴言を引いていることを指摘した。『箴言集』には他にも、恋愛や男女の仲についての数々の辛辣な格言が含まれ、スタンダールはそこから恋愛についての想念を多く汲み上げた。『恋愛論』(De l'Amour, 1822)はとくにその趣の強い書物である。「箴言」形式に魅せられたスタンダールはこのエッセイにおいて、自ら同様の試みを行ってみたかったのであろう。「情熱恋愛」、「結晶作用」、ヨーロッパ各国の恋愛、女子教育について論じた本論のあとに、169の長短さまざまな箴言、考察からなる「断章」を置いた。その中にはラ・ロシュフコーからの借用もあり、たとえば断章 25「恋をすると、人は往々にしてもっとも信頼しているものまで疑う(ラ・ロ[シュフコー]、355)¹⁸」という一節がそれに当たる。番号が不正確なのと(実際は箴言 348¹⁹)、冒頭部分にやや異同があるものの、比較的忠実な引用である。スタンダールはこの部分に続けて「逆にそれ[恋]以外の情熱においては、いったん自分で確かめたことはもう疑わない」と補っており、恋愛という情熱の特異性をより強調している。

また、女性の嫉妬について述べた第 37 章「ロクサーヌ」においてもラ・ロシュフコーの名を挙げ、「人は嫉妬していることを恥じて認めたがらないが、過去に嫉妬したことがあるとか、これから嫉妬することがあるかもしれないということは誇る」という、箴言 472 の一部をほぼ正確に引いている²⁰。同じく人の自負心 (orgueil) の不可思議を問題にするにも、『恋愛論』では嫉妬の感情にも性差があるという観点から、恋愛のためにより多くのものを犠牲にしている女性にとっては、「過去に嫉妬したことがある」ことすら屈辱的で、認めがたい事実となる、というところまで議論が進められている。そしてスタンダール自身、この箇所に注をつけて、本書(『恋愛論』)には他にも著名な作家による箴言の類が多く取り入れられているが、彼らの箴言が「事実」(des faits)を示しているとすれば、自分は「歴史」(de l'histoire)

¹⁷ La Rochefoucauld, *op.cit.*, p. 38.

¹⁸ Stendhal, *De l'Amour*, éd. établie par Victor Del Litto, Gallimard, coll. « Folio », 1980, p. 253.

¹⁹ La Rochefoucauld, *op.cit.*, p. 83.

²⁰ Stendhal, *De l'Amour*, éd.cit., p. 127.

を書いているのだ、と強調する。箴言はその性質上、断片的な記述であることを免れ得ない。とりわけラ・ロシュフコーの箴言は一行におさまるものも多く、ラ・ブリュイエールやシャンフォールと比べてもきわめて短い。スタンダールはラ・ロシュフコーの箴言をいわば枕として、それらを自らのバイアスに沿ってふくらませ、より合わせ、同時代人たちの恋愛の虚実を総体的に描き出すことを目指したのである。

『恋愛論』におけるラ・ロシュフコーへの参照は、次に取り上げるラ・ブリュイエール同様、わずかなものにとどまる。ただしジャック・トリュシェの指摘するように、『箴言集』の中で「恋愛」に関する項目は実に多く²¹、それらを拾い読みしていると、スタンダールの主張や発想との共通点の多さに驚く。たとえば、よく知られた「結晶作用」の源泉のひとつとして指摘されるのが、「誠実な愛」とは「絶え間ない心変わり」であり、「恋人のもつあらゆる美点に、時にはここ、また時にはあそこというふうに、次々と心を寄せていく」過程であると説く箴言 175 である²²。概して、『箴言集』は男女の恋愛に対しては手厳しい。恋愛もまた「自己愛」の支配を免れないと考えるラ・ロシュフコーにとって、たいていの女の恋は「媚態」(coquetterie)の、男の恋は「嫉妬」(jalousie)の変形にすぎない²³。ただしこれもよく指摘されるように、ラ・ロシュフコーはすべての恋愛を錯覚や思いこみと見なしていたわけではなく、「嫉妬の入りこむ余地もないほど激しい恋」(箴言 336)というものも存在すれば、女の「媚態を治してしまう」ことこそ「恋の最大の奇跡」である(箴言 349)、とも書いている²⁴。「真の恋は幽霊と同じで、みなが話題にするが、見たことのある人はほとんどいない²⁵」(箴言 76)とあるように、「真の恋」はいかに稀といえども確実に存在すると、ラ・ロシュフコーは考えていた。

²¹ La Rochefoucauld, *op. cit.*, Introduction par Jacques Truchet, p. LXVIII.

²² *Ibid.*, p. XLV. 注釈者のトリュシェはここにラ・フォンテーヌの『寓話』の「二羽の鳩」(*Les deux Pigeons*)との親近性を見ている。

²³ 以下の箴言を参照。「女はしばしば恋をしていないのにしていると思ひこむ。」(箴言 277)、「自分が恋人の女を愛するのは相手への愛からだとする男は、大きな考え違いをしている。」(箴言 374)、「嫉妬の中には愛よりも自己愛が多く入りこんでいる」(箴言 324)。 *Ibid.*, p. 71, p. 89, p. 79.

²⁴ *Ibid.*, p. 81, p. 84.

²⁵ *Ibid.*, p. 24.

かりに純粹で、他の情念の混じらない愛があるとすれば、それは心の奥底に隠され、われわれ自身も知らない愛である²⁶。(箴言 69)

これを読むと、「情熱恋愛の徒」たるスタンダールと、出し抜き、出し抜かれる宮廷の男女のかけひきの中でも、ひそかに、しみじみと心の通い合う恋や、逆に一気に燃え上がる激しい恋があることを知っていたかもしれないラ・ロシュフコーが、意外に近いところにいたのではないかと思われてくる。スタンダールが『恋愛論』の中でくりかえし強調する、恋する男が犯す過ちの滑稽さ(これこそが「情熱恋愛」の証である)をも、ラ・ロシュフコーは見抜いていた。

いずれの情念もわれわれに過ちを犯させるが、恋はその中でももっとも滑稽な過ちを犯させる²⁷。(箴言 422)

具体的な劇作品のプランを練っていた 1803 年 3 月 20 日のメモに、若きスタンダールは「フランス最高の詩人」(ここでいう「詩人 *poète*」)とは劇作家のことを指す)になるための心構えを記している。人間の情念や性格についての理論的著作を読みこみ、またそれを効果的に表現するための筋書やせりふを古今東西の劇作家の先例に求め、抜粋と考察を連ねていた時期にあたるが、ここでもスタンダールは箴言 41 を正確に引用し(「小事にばかりかかずらう者には大事ができなくなるものだ²⁸」)、とにかく筋の展開や場面を具体的に構想することを第一に掲げている²⁹。もちろん、ここには二重の意味がある。若者らしい名声を求める心は、この箴言を人生訓としても受け止めている。「フランス最高の詩人」の称号は、憧れの社交界への入り口を開くことにもなるからだ。スタンダールにおけるラ・ロシュフコーの受容には、つねにこの両方の側面があったように思う。文学上の師は同時に人生の先達でもあった。

ラ・ブリュイエール

今回、スタンダールの文学修業時代の文章を再読するうちに、主題のうえで後年の『恋愛論』に連なるひとつのメモに行き当たった。1803 年 7 月に記

²⁶ *Ibid.*, p. 22.

²⁷ *Ibid.*, p. 98.

²⁸ *Ibid.*, p. 15.

²⁹ Stendhal, *Journal littéraire*, t. I, *Œuvres complètes*, éd. établie par Victor Del Litto, Genève, Cercle du Bibliophile, 1970, p. 135.

された「フランス人女性の性格について」（«*Du caractère des femmes françaises*»）と称するメモには、フランス女性の性向とその「攻略計画」（«*plan de campagne*»）が、ラクロの小説『危険な関係』やエルヴェシウス、革命期の政治家エロー・ド・セシェル（Hérault de Séchelles, 1759-1794）の著作からの抜書きをまじえて、とりとめもなく記されている³⁰。そこには慎みの観念ゆえに不誠実なふるまいに及ぶ女性たちの姿や、女たちが日常的に感じている退屈がひとめぼれの素地を作るといった考え方、貞淑な女とコケットな女の対比など、のちの『恋愛論』にも通ずるテーマが散見される（ただし『恋愛論』には恋愛指南書的な性格は薄い）。若干 20 歳のスタンダールが乏しい経験を補うかのように借用する書物の中にはラ・ロシュフコー（箴言 367）のほか、ラ・ブリュイエール『カラクテル』の「女について」（«*Des femmes*»）の章も含まれ、後者からの抜粋はかなりの分量に及んでいる。好色な女とコケットな女（「女について」(22)、弱い女(23)、移り気な女と尻軽な女と浮気女(24)、都会の女と田舎の女(30)、社交界と距離をおいている女(34)、貞淑ぶる女(48)など、さながら女性の見本帳のような抜書きが並ぶ。「つれない女とは、これから愛することになる男にまだ出会っていない女のことだ」(81)のように³¹、『恋愛論』をとびこえて、後年の小説『赤と黒』のレナール夫人の人物像を髣髴とさせる表現もある。

ほぼ 20 年後の『恋愛論』におけるラ・ブリュイエールの直接の引用は一箇所にとどまり、それもここに挙げられた抜粋とは別の断章である³²。ロラン・バルトの言うように、ラ・ロシュフコーが「人間全般について語ること」や、「一冊の本のなかに人間世界のすべての領域を含みこむことができた、最後のモラリスト³³」であるとすれば、スタンダールが『恋愛論』の中でおこなった男と女の類型化はそこまで徹底したものではない。スタンダールにおいては、むしろ実人生で出会った女たちが真先に類型を提供する。その意味で、ラ・ブリュイエールが「女」という集合を囲い込むために設定した、無数の

³⁰ Stendhal, *Journaux et papiers*, Vol. I, éd.cit., pp. 353-357.

³¹ La Bruyère, *Les Caractères*, texte établi par Robert Garapon, Garnier Frères, 1995. それぞれ p. 116, p. 117, p. 117, p. 119, pp. 118-120, p. 126, p. 134. 翻訳にあたっては『カラクテル』、上・中・下巻、岩波文庫、(関根秀雄訳)を参照した。

³² 『恋愛論』第 1 巻第 7 章冒頭の記事「女は男に愛のしるしを与えることによって結びつく」。これはラ・ブリュイエール「女について」の 16 の前半を切り出したもので、もとのテキストでは、いかにもラ・ブリュイエールの対句が後に続く「いっばう、男はまさにその愛のしるしによって癒える」(La Bruyère, *ibid.*, p. 116)。

³³ ロラン・バルト「ラ・ブリュイエール」、『ロラン・バルト著作集 5 批評をめぐる試み 1964』所収, p. 333, (吉村和明訳)。

小集団 —— 「すでに盛りをすぎた女」（「女について」28）、「好色かつ慈善家の女」（35）、「指導僧を愛人にもつ女」（36）等々、もちろん、そのうちの一部には実在のモデルが存在するだろう —— は、バルトが「分割の想像力³⁴」と呼んだラ・ブリュイエールの精神のありようを如実に物語るものであり、20歳のスタンダールも、ほぼその20年後のスタンダールも、その中から自身の関心に沿う類型のみを取り出した、ということだろう。

アンリ・フランソワ・アンペールが指摘するように、スタンダールの著作全体でラ・ブリュイエールの名が引かれる頻度はさほど多くはないが、上の例からもわかるように、この作家に対するスタンダールの関心は生涯を通じて続いた³⁵。論文の冒頭で言及した自伝『アンリ・ブリュエールの生涯』の記述を思い出そう。ラ・ブリュイエールが20歳のスタンダールに「文学教育を施した」日から、50歳を過ぎた時点で「いささか幼稚で空疎にうつる」まで、もちろん評価の揺れはある。ただそれも、その時々々のスタンダールの知的関心や文体の嗜好と軌を一にしており、ラ・ブリュイエールに対する評価の変化が、スタンダール自身の文学観の変容を映し出すという側面がある。

スタンダールを魅了したのは、なによりも同時代の上流社会の風俗を活写した、ラ・ブリュイエールの才気あふれる文体だ。1827年から1828年にかけてイギリスの月刊誌に寄せた評論の中では、モンテスキュー、ヴォルテール、ジャン・ポール・クーリエらの風刺文学の系譜に連なる、ラ・ブリュイエールの文体の「鋭さ」（*finesse*）や「繊細さ」（*délicatesse*）をくりかえし強調している³⁶。

すでに見たように、ラ・ロシュフコー同様、ラ・ブリュイエールは当初から「模範とすべき作家」（« *Écrivains modèles*³⁷ »）のひとりであった。妹ポーリーヌに対しては、「会話のお手本」（« *un modèle de conversation*³⁸ »）とすべきことを説いている。大コンデ公の息子の教育係として、屋敷に出入りする宮廷貴族たちの虚飾に満ちた生活を間近に見るうちに磨かれた観察眼を駆使して書かれた箴言やポルトレ（肖像）は、実に変化に富む。辛辣なトーンの短い格言から、まるで軽妙な喜劇の一場面のような宮廷人やブルジョワの戯画、不幸な女の末路を物語る憂愁に満ちた挿話まで、長短さまざまの形式

³⁴ 同書、p. 336。

³⁵ Henri-François Imbert, « Stendhal et La Bruyère » dans *Variétés beylistes*, Champion, 1995, p. 215.

³⁶ *Paris-Londres, Chronique*, éd. cit., p. 802, p. 822, p. 869.

³⁷ *Journal littéraire*, t. I, éd. cit., p. 18. 1802年11月から12月にかけてのメモと推定。

³⁸ Lettre à Pauline, 11 juin 1804, in *Correspondance générale*, t. I, éd. cit., p. 148.

で書かれた断章は、読む者を飽きさせない。技法の面からも、ラ・ロシュフコーと相通ずる対照法、末尾の「落ち」の効果的な使用はもちろん³⁹、非人称的な定義、一人称によるつづき、頓呼法（呼びかけ）を駆使した二人称のポルトレ、三人称で書かれた寓話風の小話など、主題をもっとも効果的な形式で書き分けるその手腕は見事としか言いようがない。文学修行中のスタンダールはその秘訣を探るべく、「ラ・ブリュイエールの1ページを例にとって、名詞、形容詞、動詞、代名詞がいくつ含まれているか、小辞の *que* が何度くりかえされているかを数えること」を考える⁴⁰。

青年らしい学究熱のあらわれた、この計画が実行に移された形跡はないが、その翌年の1805年にスタンダールは「人間研究」の一環として、グルノーブル時代の同級生ルイ・クロゼと共同で友人たちのポルトレを書き、それを「キャラクター」（« *Caractères* »）と称している⁴¹。明らかにラ・ブリュイエールのポルトレを意識した体裁で、人物には本名、イニシャル、ふざけたイタリア風あるいは英語風の仮名があてがわれ、それぞれの人物の生い立ち、エピソード、実際に交わした会話などが、とりとめもなく記されている。後年、自ら自伝の中で書いているとおり、ポルトレというよりもむしろ裁判の報告書といった風情のテキストで⁴²、あくまでも書き手の主観が勝っており、類型化の意志もあまり感じられないが、ときおり各断章の末尾に、要するにこういう人物であるというまとめのようなものが、「要約」（« *Récapitulation* »）や「結論」（« *Conclusion* »）と称して、動詞の現在形を用いて記されている。たとえば共通の友人カミーユについてはこうある。

³⁹ たとえばよく知られた「運の賜物について」（*Des biens de fortune*）の章の83を参照。二つの段落からなるこの断章は、ジトンとフェドンという二人の男の容貌や社会的習性を書き連ねたあと、「彼は金持ちである」/「彼は貧乏人である」（*Il est riche. / Il est pauvre.*）という対句で各段落を締めくくる（*La Bruyère, op.cit., pp.203-204*）。これはバルトがラ・ブリュイエールのポルトレにおける「すぐれて隠喩的な構造」と呼ぶものの典型であり、金持ちと貧乏人のあらゆる「記号」が「連続的隠喩」の中で積み重ねられたあと、その「シニフィエ」が最後に与えられる。

⁴⁰ *Journal littéraire*, t. I, éd. citée, p. 291. 1804年2月23日の日付のあるメモ。

⁴¹ « *Caractères* », *Œuvres intimes*, t. II, éd. citée, pp. 990-1029. 1805年2月10日の日付のあるテキストをはじめとして、4月初めまで集中して書きためられたあとはまばらになり、編者のデル・リットが収録した最後のテキストの執筆時期は1806年3月と推定される。扱われている人物は男女計11名で、二人の共通の友人カミーユ・パセ（« *Ouéhéhé* »）、スタンダールがパリで知り合った文士ピエール・ダヴィッド・ルマジュリエ（« *Inchinevole* »）、クロゼの職場の同僚の技師ジョセフ・ドース（« *Perrino* »）などが含まれる。

⁴² *Vie de Henry Brulard in Œuvres intimes*, t. II, éd.cit., p. 810.

弱い男、虚栄心の喜びのためならなんでも犠牲にできるほどのうぬぼれ屋で、
[…] なにごとにおいてもきわめて凡庸。以上がこの世でもっとも月並みな性格の男である。われわれはこの男をフィラントと呼ぼう⁴³。

ラ・ブリュイエールの遠い木霊を感じさせる、過渡的なテキストといえよう。時代は下って、1812年にやはりクロゼと共同で書かれた「文体論」と称するテキストでは、ラ・ブリュイエールの文体について、比較的踏みこんだ分析がなされている⁴⁴。この時期のスタンダールは『イタリア絵画史』（1817年に出版）の執筆のいっぽうで、8年ごしの喜劇（『ルテリエ』）の草案を抱え、作劇術や「笑い」の研究も続けていた。このテキストでラ・ブリュイエールはつねに、その文体の継承者と見なされるモンテスキューとの比較において論じられており、「ラ・ブリュイエール、言い回しの宝庫」（« *trésor de tours* »）という最上級のほめ言葉にもかかわらず、全体としては旗色が悪い。スタンダールいわく、たしかに「生彩に富んだ言い回しと、月並みなことを気のきいた表現で言っただけのける技術」には見習うべきところが多い。有名な「彼は金持ちである」/「彼は貧乏人である⁴⁶」の対句にしても、黙々と性格の描写を連ねた末に、たったの一言で種明かしをする手法は彼独特のものである。頓呼法を用いても文章の品位が損なわれない点も評価に値する、等々⁴⁷。いっぽう欠点とはいえば、喜劇味 (*comique*) と感受性 (*sensibilité*) に欠けることで、ラ・ロシュフコーに比べれば、その模倣者たるモンテスキュー（『ペルシア人への手紙』）のほうがより喜劇的で、熱っぽく、味わいがあるとする。たとえば、これもまたよく知られた『カラクテル』の、スミルナの「つれない女」エミールの失恋の物語（「女について」81）にしても、「庭にいる二人の恋人を窓の上から眺めている老人の話聞くようだ」と容赦ない⁴⁸。要するに淡々としすぎているということだろうか。

「ラ・ブリュイエールは、自制していないと怒り出してしまう男のようだ。風刺に苦々しさはないが、かといって笑ってもいない⁴⁹」。喜劇や「笑い」

⁴³ *Ibid.*, p. 1006.

⁴⁴ « Du style par le chevalier de Seyssins et Dominique », *Journal littéraire*, t. II, éd.cit., pp. 361-379. 1812年6月24日から30日まで執筆。ここで扱われている作家は、順にフェヌロン、ビュフォン、モンテスキュー、ヴォルテール、ラ・ブリュイエール、ルソー、ボシュエ。

⁴⁵ *Ibid.*, p. 368.

⁴⁶ 注39を参照のこと。

⁴⁷ *Ibid.*, pp. 369-370.

⁴⁸ *Ibid.*, p. 369.

⁴⁹ *Ibid.*, p. 366.

の側面から見た場合、ラ・ブリュイエールの節度をわきまえた諧謔はたしかに物足りなく思えたかもしれない。この時点のスタンダールには「『ペルシャ人への手紙』のほうが『カラクテル』よりもはるかに喜劇(« une comédie »)に似ている⁵⁰」と思えたのである。

その後もラ・ブリュイエールに対する敬意は基本的には変わらなかったが、スタンダールが劇作家の卵から小説家に転じたとき、ラ・ブリュイエールはひとつの指針ともなり、同時に反面教師ともなる。最初の小説『アルマンズ』を執筆中の1826年10月に、デュラス夫人(Madame de Duras, 1777-1828)の恋愛心理小説『エドゥアール』(1825)を読みながら、スタンダールは「ラ・ブリュイエールの補遺を書くことだ、19世紀のラ・ブリュイエールを」と書きつけた⁵¹。ルイ14世の治世の上流階級の風俗を精密に描いたラ・ブリュイエールにならい、今の時代にふさわしい小説の形を探ること、これが小説家の道を歩み始めたスタンダールにとっての課題となるだろう。

スタンダールは『アルマンズ』で王政復古下のパリのサロンに集う貴族の子弟の群像を、『赤と黒』で七月革命前夜のパリと地方を舞台に、下層階級出身の青年と貴族の女性たちとの恋愛と葛藤を描いた。ともに主要人物たちの心理の揺れを描くことに傾注したため、主人公たちの性格の分析や長大なモノローグ(独白)によって物語の流れが中断されることもしばしばで、人物の容姿や服装、外界の描写なども最低限におさえられている。後年、スタンダールは『赤と黒』の文体が「ぎくしゃくしている」(saccadé)、「ぶつ切れ」(haché)すぎた、と反省しており⁵²、銀行家の息子である優柔不断な青年を主人公とする次の小説『リュシヤン・ルーヴェン』(1834-1835年執筆、未完)においては、それらの点についての修正をはかっている。

ラ・ブリュイエールが反面教師として立ち現れるのはそのときである。すでに見たように、スタンダールの小説には数学的命題のような格言めいた物言いがしばしば見られる。先に挙げた『赤と黒』第1部第27章中の「あらゆる正論は怒りを買うものだ」という一文を思い出そう⁵³。ところが『リュシヤン・ルーヴェン』においては、こうした表現こそが批判や逡巡の対象となる。

⁵⁰ *Ibid.*

⁵¹ *Œuvres intimes*, t. II, éd.cit., p. 101. 1828年頃に『アルマンズ』の自家製本の余白に書きこまれたメモ。スタンダールは、不能の青年を主人公とするデュラス夫人の書簡体小説『オリヴィエまたは秘密』(1826)から『アルマンズ』の構想を得た。

⁵² *Ibid.*, p. 143 (1831年6月のメモ) および p. 745 (『アンリ・ブリュエールの生涯』第2章)。スタンダールはその原因を、当時流行していたシャトーブリヤン風の大仰で長長い文体への嫌悪感に帰している。

⁵³ 注13も参照のこと。

たとえば『リュシヤン・ルーヴェン』（草稿版）の第30章において、主人公リュシヤンの思いを寄せる未亡人シャストレル夫人が、舞踏会でリュシヤンに話しかけてくる場面がある。

シャストレル夫人はいつものように、彼[リュシヤン]にむかって気さくに、優雅に話しかけた。はっとするようなことは何も言わないが、夫人のおかげで会話ははずみ、華やかなまてになった。というのもよくできた世間話ほど興をそそるものはないからである。（傍点強調は論者による）

この最後の一文について、草稿には「この一行足らずのラ・ブリュイエールはいかがなものだろうか」との書き込みが認められる⁵⁴。同じ時期にスタンダールは「小説は物語らなければならない。[...] 論文調やラ・ブリュイエール風の凝った表現は墮落だ⁵⁵」とも書いているが、いっぽうで草稿の別の箇所では、「変化をつけるため」そうした格言調の表現をあえて残すことを選択している箇所もあり、スタンダールの逡巡が見てとれる⁵⁶。

スタンダールの小説創造における反面教師としてのラ・ブリュイエール、というテーマについては、すでに多くの論文が書かれているので、これ以上は詳しく述べない⁵⁷。スタンダールとラ・ブリュイエールの40年あまりに及ぶ縁は、文字通り愛憎に満ちていたと言えるだろう。

最後に触れておきたいのは、スタンダールのラ・ブリュイエールへの敬意が文学上のものにとどまらなかったということだ。1825年にイギリスの文芸雑誌に寄稿した記事の中で、スタンダールはフランス大革命への流れをつくった知識人のひとりとして、ピエール・ベール、フォントネル、モンテスキュー、ヴォルテールと並んで、ラ・ブリュイエールの名を挙げている。

ラ・ブリュイエールは貴族たちの滑稽さをブルジョワの視線のもとにさらし、庶民がいつでも宮廷人にむけて示していた尊敬の念を打ち破った⁵⁸。

⁵⁴ Lucien Leuwen (Manuscrit autographe) dans Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. I, éd. établie par Yves Ansel, Philippe Berthier et Xavier Bourdenet, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 310 および傍注の A.

⁵⁵ *Œuvres intimes*, t.II, éd.cit., p. 243. 『リュシヤン・ルーヴェン』の草稿に残された1835年4月1日付のメモ。

⁵⁶ Lucien Leuwen, éd. cit., p. 229 および傍注の D.

⁵⁷ Henri-François Imbert, *art. cit.*, p.226 et sq. および Yves Ansel, *Stendhal, le temps et l'histoire*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail, 2000, pp. 36-52 (II.3. La tentation La Bruyère).

⁵⁸ « Lettres de Paris par le petit-neveu de Grimm (3) », *London Magazine* (mars 1825) dans

復古体制に仕えながらも、心情的には反体制を貫いたスタンダールにとって、ラ・ブリュイエールの名は反権力の象徴でもあったのである。